

07・イヴとこれから公認愛

『06・対面座位で貝合わせしながら、好き好き連呼本気セックス』から数時間後。土曜日の、十五時ごろ。

天気は晴れ。気温も心地よいあたたかさで、とてもよい春の午後だ。

場所は主人公の自宅内居間の、『ごろ寝ソファ』の上。

あれから主人公とイヴはひとしきり楽しい時間を過ごし、今はまったくムードである。そうしていると、ふいにイヴがこちらに手を伸ばし、抱っこのおねだりをしてきた。

●中央

「甘々、媚び媚びな声で甘える。

一杯セックスして、一杯主人公の愛情を確認して、この上なく幸せな気持ち」
先生、抱っこして？」

〈主人公〉

「イヴちゃんは抱っこが大好きだねえ♡」

主人公、もはや『いいよ』と返答するのすら省略して、イヴを抱きしめる。
イヴにとって、これは願えば必ず叶う事だと思ってほしいからだ。

SE1 主人公とイヴが抱き合う音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「甘々、媚び媚びな声で甘える。

先ほど感じた不安も完全になくなって、思いっきり甘えている」

うん。大好き。

先生にハグされてる時が、私の人生で最高の瞬間だから♥」

〈主人公〉

「！」

——そ、そおなんだあ！

う、嬉しい。わたしこそ、今、人生で最高の瞬間です……♥

えへ、えへへへへ。

〈主人公〉

「ふふふ。毎日抱っこしてるじゃん。

それなら、最高の瞬間いっぱいあるね？」

主人公『毎日してあげてるじゃない……♥』と、余裕の態度を取りつつも、顔はゆるゆるにゆるんでおり、にへにへしている。

言葉と顔が一致しないので、何だか面白い感じになってしまっている。

それはもちろん、イヴにも丸わかりな事だろう。

でも、本当に嬉しいのだ。

イヴを淋しくさせない。具体的には毎日抱きしめて、必要な時は必ずそばにいるようにして、安心して毎日を過ごせるようにする。

主人公は、このために頑張ってきたからだ。

●中央 至近距離

「得意げに。」

『私の恋人、つまりあなたは毎日それだけ素晴らしい事をしてくれるの』と、してくれ

る本人に対して自慢している」

そうだよ♡ だから毎日最高の。

ふふふ。先生、だーいすき。

なんか眠くなっちゃったしさ。このままお昼寝しよ♡」

〈主人公〉

「いいよ♡ じゃあもつとぎゅーしたげる♡」

SE2 主人公がイヴを強く抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「きゃっきゃとはしゃいで」

キャー♡

先生苦しい♡ 苦しいよお♡

ふふふふ」

主人公、ふざけて、ますます強くイヴを抱きしめる。

すると、イヴが小さな女の子のように、きやつきやと笑った。
主人公は、それがかわいくてたまらない。

初めて出会った頃は、こんな風に笑う女の子だとは知らなかった。

知らずにそのまますれ違う可能性もあった中で、知っている方の人生を選べた事は、何よりも幸せな事だと思った。

イヴ、主人公にしっかりと抱きついて、左耳に話しかける。

● 左 至近距離

「うつとりとため息をつく」

はあ……
♥

【少し間をあけてから。

イヴは今寝転がっている『ごろ寝ソファ』がお気に入り】

この『ごろ寝ソファ』やばいよね。

好きな時に居間で寝れる。

考えた人も、買った先生も天才。

【少し間をあけてから。

息遣いだけで表現する。また、うつとりと息を吐く】

はあ……♡」

イヴ、左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「心底満足げに。また、主人公にも同じように思っていてほしい」
こうやってぎゅーってし合っていると、やばい。

【幸せそうに笑いながら】

やばくない？」※

〈主人公〉

「わかる♡ やばい♡

『もう他に何にもいらないなあ♡』って気持ちになる♡」

主人公、常々思っていた事をイヴの口から言われ、嬉しくなる。
バカなカップル全開ではしやぎながら、甘々の会話を続ける。

イヴ、主人公にしっかりと抱きついて、左耳に話しかける。

●左 至近距離

「主人公も同じ意見なのが嬉しい」

えへへ。やばいよね♥

「少し間をあけてから」

何かね、私はね♥

「これまで通りの調子で普通にうきうきと話しているが、かなり真剣な本音。

これを主人公にとっても伝えたかった」

こうしてると『私の欲しかった物ってこれなんだ』って思う。

『私はこれが欲しくて、ずーっと生きてきたんだなあ』って思う♥」

〈主人公〉

「わたしもだよお……♥ 大好き。愛してる。しゅきしゅき♥ イヴちゃん♥」

SE3 主人公とイヴがソファの上で転がる音

「最初から最後まで流す」

主人公、またもたまらなくなっってイヴを押し倒し、めちやくちやにキスをする。

『愛してる』という言葉は、普段は格好つけているように聞こえて照れてしまい、これまでなかなか言えずにいた。

だが、今は自然と出た。

それは昨日から今日にかけて、イヴとたっぷりコミュニケーションがとれたからかもしれない。

さつきイヴが先に『愛してる』と言ってくれたからかもしれない。

年上なのに後手に回った自分で申し訳ないが、その分、今後沢山、口にしてみようと思った。

●中央 至近距離

★「【※15秒※】キスする。押し倒されて上にのしかかられ、めちやくちやにラブラブキスされまくるキス」★★

んっ♡ んっ♡ んー……♡

んんうっ♡ ちゅ♡ れろっ……れろれろっ……♡ んっ♡

【※3回※】 ゆっくりと呼吸する。甘々な吐息】

ふう。ふう。ふう……♡

【※2回※】 キスする。呼吸が整ったかと思いきや、またキスされる】

んっ♡ ちゅっ♡

【※1回※ キスする。唇を離す音がちゅぽつと響く、水っぽいキス】
ちゅっ♡

【幸せいっぱい笑う。

唇を離して、すぐ主人公と見つめ合って微笑み合っているイメージ】
ふふふ♡

【少し間をあけてから。

今ならうまく話せるかも、と思っている】
ねえ先生。ちよつと昔の話していい？」

〈主人公〉

「ん？ うん♡ いいよ♡聞かせて♡」

SE4 主人公とイヴがソファの上で転がる音

【最初から最後まで流す】

主人公、ひとまずのしかかっているのをやめて、脇に転がる形で話を聞く姿勢になる。
おや。

いったい、なんだろう。

イヴちゃんってば、これから、何を話してくれるつもりなんだろう……？

イヴ、主人公の隣に寝そべる形で話し始める。

●中央 至近距離

「とても嬉しい。」

主人公がすぐさま聞く体勢になってくれるので」

へへ。じゃあ、あのね？

「少し間をあけてから。」

話す内容は決めているが、どういう切り出し方にするかは、うまく決められていなかった。『こんな感じ』とは『昔から不在がちで、特にイヴが逢瀬学園在学中は、ずっと離れて暮らしている事』を指している」

まずさ、うち、親こんな感じじゃん。

ずっと忙しくて。私、ずっと一人暮らしじゃん」

〈主人公〉

「……うん。そうだね」

SE5 主人公とイヴがソファの上で姿勢を正す音

【最初から最後まで流す】

主人公『これはもしかすると、とても真面目な話が始めるのかもしれない』と思い、寝転がって聞くのをやめ、姿勢を直す。

するとそんな主人公を、イヴがいとおしげに見上げる。

それはまるで『そういうところが大好き』と言われているようで、主人公はなんだか照れてしまった。

●中央 至近距離

「ぼつぼつと、昔話を始める。

なお、ずっと一人暮らしであった事に関しては、特に気にしていない。

それは、イヴ自身の希望でもあったため。具体的には『無理に両親について行ってもあまり一緒に過ごせない事には変わりないし、それなら、長期的に一人暮らしになっても、逢瀬学園で入学・卒業したい』という意向を汲んでもらっての一人暮らしであるため』それは自分で選んだ事だから、もちろん納得はしてるんだ。

【少し間をあけてから】

でも、昔はなんか、時々淋しいなって思う事があって。

だから割と外出（そとで）たり、色んな事チャレンジしてみたりして……。

『好きな事見つけたり、すごい仲いい人ができたりすれば、淋しくなくなるんじゃないか』って思ってたんだよね。

【少し間をあけてから】

でも、何をやっても、どこに居ても。

【イヴとしては、さほど深刻ではない。

『なんだか違う』『あまり自分好みではない』と思う事はあっても『嫌な思いをした』『もう懲り懲りだと感じた』といった事はなかったからである。むしろ、色々なチャレンジを通じて出会った人も、経験そのものも良いものばかりだったのに、それでもなぜか熱中しきれない事が問題だった』

『何か違うなあ。私のしたい事ってこれじゃない気がするなあ』って思ってた。

【自分の性格について語る。

『私は、人とワイワイはしゃげるタイプの人間じゃないから』という意味で言っている』
ほら私、めっちゃ『わーっ』て騒げる方でもないから。

【普段と変わらないトーンだが、内心申し訳なく思っている】

そんなつもりなくても、周りに気い遣わせちゃう事あるしさ。

【少し間をあけてから。

『氣いして』は『氣がして』という意味」

だから、なんか悪い氣いして、段々遊びとかはそんな行かなくなつて。

【少し声が明るくなる。結果的に、こちらの方が性に合っていたため。

基本的にイヴは、少人数でまったり遊んで、お世話係をするのが好き】

そしたら一人で居るのも楽しいし、学校やバイトは普通にうまく行つてたから。

【イヴとしては、さほど深刻ではない。

やはり『すぐく自分に合っている！』というものはなかったものの、周囲の人はおおむね温かく、日々は平和で『漠然とした淋しさ』があるのみだったので】

『時々なんか淋しいのは、もうしょうがないか』って思い始めて。

そんな時、先生に会つたんだよね」

〈主人公〉

「……………うん」

主人公、静かに相槌を打ちつつも、ここで自分が出てきて驚く。

イヴの過去話を聞いていたら、途中から自分の話題に切り替わったからだ。

知り合つて半年以上にもなるのだから、確かにそれは当たり前前の事ではある。

けれど、主人公はドキドキした。

イヴの人生にはちゃんと自分があり、自分の登場が彼女に何らかの影響を与えている。それを、改めて実感したからだ。

●中央 至近距離

「ぼつぼつと、過去の出来事を語る。

ここから、前日譚での出来事を振り返る形になる」

私にとって、先生は不思議な感じだった。

【前日譚01、02の事を思い出している。

当時はまだ主人公の人柄をつかみ切れず、驚きの連続だった事を思い出している。

『なんか心配な人だなあ』と感じたのは、マンシヨンのロビーラウンジで眠っていたため。

また『サツて助けてくれて』とは『事もなげにさりと、スマートに助けてくれて』という意味】

私の事知らないのになって思ったら、普通に知ってて。

最初は『なんか心配な人だなあ』って思ったのに、次会った時は、サツて助けてくれて。

【前日譚03の事を思い出している。

とても微笑ましい気持ちで、声が弾む。

イヴは当時のバイトの後、迎えに来てくれている主人公の車を見つけて、『大人』という感じがして、すごくドキドキした。あの時にはもう、主人公を好きになり始めていたの

ではないかと思っている。だが、その直後、水漏れ騒ぎで『うえーん』と嘆いて自分に助けを求めてきたり、自分の作った夜食を、はふはふとおいしそうに食べていたり、泊まる事を一度は断ったくせに、最終的には自分の隣でむにやむにや眠っていたりした事を思い出す」

だから、『やっぱ大人だなあ』って思ったら、なんか可愛くて。
私のご飯、ちっちゃい子みたいに喜んで食べてくれて。

【くすくす笑いながら。これは特に面白く、可愛らしかったのだから】
最初は遠慮してたのに、いつの間にか普通にうち泊まってるし。

【少し間をあけてから。】

前日譚01から03を総括すると、この言葉になる」
友達みたいに話しやすいのに、ちゃんと先生でさ。

【前日譚04の事を思い出している。】

一緒に遊んだゲームの事を思い出している」
楽しい事、一杯教えてくれるし。

【前日譚02から05の事を思い出している。】

それが、何よりも嬉しく、頼もしくて、好きになる大きな要因だったので」
怖い時は絶対傍にいてくれる……」

〈主人公〉

「……………」

●中央 至近距離

「照れ笑いして。すべて本音だが、改めて主人公に伝えるのは何だか恥ずかしい」だから、すぐ好きになっちゃった。

「ここから、当時の自分のポジティブな意見を述べる。

淡々と話しているつもりだが、少し声がうきうきしている」

『私はずっと、先生みたいな人と居たかったんだ』

『先生が居てくれたら、もう淋しくないんじゃないのかな』

『先生の為なら、できる事はなんでもしたいなあ』

「少しだけ間をあけてから。

先の三つとこれは、願望や意見の方向性が大きく異なるので」

『先生も、同じ風に思ってくれたらいいのにな』って思ったの。

「少し間をあけてから。

少しだけ淋しげに、声のトーンが下がる。

ここから、当時の自分の、ネガティブな意見を述べる。

最終的にはそうはならなかったが、当時は、こうするのが当然だと思っていたし、この

意見自体は、今でも間違っていないと思っている」

でも、付き合うとかは無理だろうから。

一緒に居たいなら、我慢しなきゃいけないと思ってた。

怖い人が捕まって、お迎えがなくなっても。

それでも仲良くしたいなら、私は先生と『生徒として』『同じマンションの人として』付き合う。

それ以外になるのはダメ。

【少し間をあけてから】

……だから好きとかは、絶対言っちゃいけないって。

【少し間をあけてから】

声が少し明るくなる。とても幸せな気持ち」

でも、そうはならなかった。

先生が『我慢しなくていい』って。

『一緒に居よう』って言うてくれたから。

【少し間をあけてから】

少し照れながら、でもとても幸せな気持ちで」

だからね。私。あの時からずっと。

【『大丈夫だ』をととても幸せそうに】

先生にハグされてると『大丈夫だ』『もう一人で淋しくしてなくていいんだ』って思えるの。

【少し間をあけてから。

もう照れず、素直な想いを打ち明ける】

……だって、こうしてると、あの日駐車場で。

あんなに寒かったのに、見つかるかも知れなかったのに。

先生が帰らないで、私をぎゅってしてくれた。

その時の事を思い出すから……♡」

〈主人公〉

「イヴちゃん……」

主人公、感激のあまり、思わず泣きそうになる。

そうか、イヴちゃんはそんな風に思ってくれていたのか……。

なんだかわたしが泣いちゃいそうだ。

うう。イヴちゃん、大好き……♡

と、目をうるうるさせてしまう。

これによって、今度は顔と言葉が完全に一致したが、これはこれで面白い感じになってしまった。

肝心な時に、なんだかしまらない。

それは主人公にとっては大きな課題だが、イヴにとっては特に愛おしいところらしい。とても優しく、温かい目で見つめ返してくれる。

〈主人公〉

「……そうだったんだね、イヴちゃん。

そんな風に思ってくれてたなんて、わたし、すごく嬉しいよ。

……そうだよ。もう大丈夫なんだだよ。

イヴちゃんのそばには、もう、ずーっとわたしが居るんだからね♥」

●中央 至近距離

「【とても嬉しい。

知り合ってからずっと変わらず主人公が優しくて、自分を守ってくれるので】
ふふふふ♥

【優しく、穏やかに補足する。

主人公が優しくて、不安がる自分のそばにいてくれたのは『付き合ってから』ではなく『知り合った時からずっと』なので。

だから、その時にはすでに淋しくなかった事を伝えたい」
でもね。付き合う前からも。先生に会った時から、私もう淋しくなかったよ。

【とても嬉しい。思わず笑顔になりながら】

だって大体毎日何かあって、ずっと一緒に居るんだもん……♡

【少し間をあけてから。

しつとりと、真剣にお礼の気持ちを述べる。

まだ伝えたい事がある。

イヴは、主人公が自分と過ごすために支払った犠牲の事も理解している。

たとえばそれは、一緒に時間を捻出するために仕事で無理をしたり、イヴ以外の誰かと遊びに行きたい時もイヴを優先して断ったり。誰かに恋人の有無を聞かれてもあいまいに答えるしかなかったり、家族や友人にも秘密を持ったりする事である。

主人公は気にしていないだろうし、そもそも何かを犠牲にしたという意識さえなさそうだ。仮にこの件について指摘しても『それはイヴちゃんも同じでしょう』と、イヴの事を案じ始めるだろう。

だからこれまで話題にした事はなかったが、イヴは気になる」

先生。いつもありがとう。

先生が私と居るために、一杯苦勞したり、無理したりしてくれてるの知ってるよ。
先生は平氣そうにしてるけど。本当は色々、大變な事もあるんだよね。

【少し間をあけてから】

それでも私を選んでくれて、ありがとう……♡」

〈主人公〉

「イヴちゃん！」

……いかん！ またイヴちゃんが遠慮モードに入りそうだ！

主人公、ここでまたもイヴが自信なさげな空気を醸し出してきた事に気づき、慌てて軌道修正を試みる。

イヴが想像した通り、主人公には無理をしているという自覚がないし、自分の事よりも常に、イヴの事が心配なのである。

具体的には、脇に置いていたタブレットを取り出し『とあるもの』を見せようとする。

それは、まだ、というか、当面イヴに見せるつもりはなかった。

しばらくは、主人公のひそかな趣味として続くもののはずだったものだ。

だが、この感じならば、もう見せてしまってもいいかもしれない。

主人公はそう考えたのだ。

——これ、多少というかなりというか、下手すると『研究』よりもよっぽど気持ち悪い感じかもしれないけど……。

ううん。大丈夫。見せちゃえ。

今のわたしとイヴちゃんの関係なら、きっと大丈夫。

これを見せるって事はほとんどプロポーズみたいなものだけど。
わたしの真剣な気持ちも知ってもらう、いいチャンスだ。

主人公、そう思いながら、タブレットを差し出す。

●中央 至近距離

「きよんとんとして。

いきなり新しい話題を切り出され、さらにタブレットまで差し出されたので少し驚く」
はいっ？」

〈主人公〉

「あのね。そんなイヴちゃんに見てほしいものがあるのですよ」

●中央 至近距離

「きよとんとして」

うん？

「一瞬ポカンとした後、声が弾んでくる。

遅れて『嬉しい』という感情が沸いてくる。

何を見せてくれるのかは皆目見当もつかないが、主人公が自分に見せたいものがあるよ
うなので」

えっ。何々（なにになに）。何を見せてくれるの？

「嬉しさのあまり、素直になれなくなる。

いつものトーンで。少しだけ主人公をからかいながら」
このタブレット、エロ動画以外にも何か入ってるの？」

くっ！ どうせ自分のスマホもえっち漫画だらけのくせに！

主人公、ほんの少しだけ『くうっ』となるが、そこは大人の余裕をもって、あえて指摘
しないであげる事にする。

早速タブレットをタップしながら『それ』の納められたフォルダへ進んでいく。

〈主人公〉

「そうだよ♡ 見ていただけます？」

●中央 至近距離

「【甘々に】

うん。見る♡」

〈主人公〉

「まずさあ、将来わたしたちが結婚する時の話なんだけど」

●中央 至近距離

「【あからさまに嬉しそうに。】

主人公の方から、将来の事を切り出してくれるのがとにかく嬉しい」

えっ♡ 先生、そんな先の事まで考えてくれたの？」

主人公、最初からストレートに、どかんと切り出す。

変に遠慮したり、もったいつけた言い方をしたりすると、かえってイヴを不安にさせて

しまう。

なので『将来わたしたちが結婚するのはまあ、当然の事なんですけど……』という態度で臨むくらいがいい。そう思ったのだ。

〈主人公〉

「もちろんそうよ。

イヴちゃんとの幸せな未来をイメージして、それに向けて頑張る事がわたしの生きるモチベーションですから！」

●中央 至近距離

「嬉しすぎて、戸惑う。主人公がそのように言って、考えてくれている事がとても嬉しい。その結果、『そっか』以外の語彙がなくなってしまう」

そっ、か……♡」

するとこれが功を奏し、イヴがはにかんだように笑ったので、主人公は嬉しくなる。自分は、この子を幸せにする事ができる人間なのだ。そんな実感が、主人公に自信をくれる。

〈主人公〉

「あっ……。もしかして、早まりすぎてた……？」

だから主人公は、わざとたずねる。

これは、わざとらしいにもほどがあるリアクションだ。

我ながら、演技が下手すぎる。

というか『ノー』と否定される事をわかっていて、聞きたい言葉を、言わせるように誘導するなんて、まるでイヴのやり口そのものである。

だから、ちよつとずるいというか、無理がある気もするが……。ほんの少しだけ不安なのは事実なのだから、許してほしい。

●中央 至近距離

「とても幸せな気持ちで否定する。まさか、ここまで考えていたのは驚きだが、それだけ主人公が真剣である事が伝わってきたので」

ううん。すっごい嬉しい♡

【ドキドキしながら、続きを促す】

これからの事。先生がどんな風に考えてくれてるのか、聞きたい」

主人公、望み通りの回答を得て、顔をデヘデヘ、デレデレモードに戻しながら、嬉々と話し始める。

これで本当は、ほんの少ししか不安に思っていなかった事がバレそうだが、それも見逃してもらおう。

〈主人公〉

「えへへ。じゃあ、話すね♥

……まあ、もちろんこれは決定とかじゃなくて、現在のわたしの希望というか。候補の一つとして聞いてほしいんだ。

正式なやつは、これからイヴちゃんと一杯話し合いながら決めていきたいなと思ってるよ」

●中央 至近距離

「とても嬉しい気持ちで相槌を打つ。

主人公が、自分との将来について考えてくれている事がとても幸せ」
うんうん」

主人公、ずいぶん多い前置き付きで話し始める。

それでも、多少は緊張しているのである。

イヴはそんな主人公の未来展望を、幸せな気持ちで聞いている。

〈主人公〉

「で、前置きが長くなっちゃったけど。

わたしね。実は南の島に、すっごい憧れがあるんだ！

イヴちゃんさえよければ、いつか一緒に行きたいと思ってるの。

……具体的にはさ、こういう感じのところに憧れてて……」

主人公、タブレットを操作し、特にお気に入り南の島の画像を表示する。

●中央 至近距離

「驚きと嬉しさで声が弾む。

とある南の島にある、海を眺めながら泊まれる美しい場所の画像を見せられる。とても興味が沸き、ぜひ行きたいと感じる。

また、まさか、このような所に泊まれるとは知らなかったの、驚く」

えっ、こんなとこ泊まれるんだ……！

初めて知った♥」

その途端、イヴのテンションもさらに上がる。
よかった。『まるで好みでない』という事はなさそうだ。

〈主人公〉

「ね♥ わたしもね、実は最近知ったんだ。
あとね、たとえばここだったらね。海とか、外の景色を眺めながら泊まれるんだよ。
素敵じゃない？」

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。」

感動で、ちょっと泣きそうになりながら。

もし将来本当に主人公とここへ行けたら、どんなに素敵だろうと想像している」
いいね……♥ 私もここ、行ってみたい」

〈主人公〉

「でしょ？ でしょ？」

●中央 至近距離

「甘々に同意する」

うん♥

【少し間をあけてから。

『新婚旅行』を、勇気を出して、恐る恐るという感じで言う。

それはイヴの夢だが、本当に願っていい事なのか少し不安だったので
いつか新婚旅行。する時は。ここがいい♥」

〈主人公〉

「じゃあ、ぜひその方向で♥

実は他にも画像とかホームページとか集めててさあ。たとえば……」

●中央 至近距離

「どきどきと切り出す。

『この雰囲気なら、言えるのではないか』と思っている」

じゃあ、あの……」

〈主人公〉

「うん？」

主人公が次のフォルダを開こうとすると、ここで、おずおずとイヴが切り出した。

これは、もしかすると……。

主人公、甘い予感にドキドキしながら、指を止め、イヴの次の言葉を待つ。

● 中央 至近距離

「どきどきと切り出す。」

『この雰囲気なら、言えるのではないか』と思っている」
「だったら私も、してみたい事、あるんだ」

きたー！

……ああ、でもダメ。

ここで過剰反応したら、かえってイヴちゃんが話しづらくなっちゃう。
おとなしく話を聞かなくちゃ。

〈主人公〉

「……ほんと？　なにかな♥　聞きたい♥」

●中央　至近距離

「ここから※マークのセリフ終わりまで、もじもじと、ときどきと。ゆっくり、『。』ごとに区切って話す。

恥ずかしいしとても照れるし、自信もない。だが、それでもぜひこの事を伝えたい。それは、自分との将来を真剣に考えてくれる、主人公の気持ちに応えたいからである」
あの、ね。

まだ。ずっと先の話にはなると思うけど。

【少し間をあけてから。

ものすごくドキドキしている。ものすごく勇気を出して、将来の夢を伝える】
私。先生とお揃いのウェディングドレスで式挙げたい。

これから、ちよつと時間はかかっても。

ちゃんと親に認めてもらって、友達とかにも知ってもらって。

私と先生が。本当にお互い大好きだって事を、わかってもらって、結婚式したい……♥

【少し間をあけてから。少し不安そうに。

先ほどの主人公同様、きっと望みの答えが得られるとわかっている、緊張する」
どう、かな？」

〈主人公〉

「……もちろんだよ♥ イヴちゃんのしたい事は、わたしのしたい事だもん」

●中央 至近距離

「涙ぐんで。泣きそうなほど嬉しい」

あ……♥」

主人公、涙ぐむイヴの手に手を重ね、その目を見て、優しく、でもはっきりと伝える。
内心は飛び上がりそうなほど嬉しかったが、ここは大人として抑えておくところだ。
自分が先に感情を爆発させたら、イヴがそうする瞬間を逃してしまうかもしれない。
せっかく話してくれたのだ。邪魔をしてはならない。

〈主人公〉

「しよう。叶えよう。絶対。うちの家族や、イヴちゃんのご家族。

わたしたちの親しい人たち、皆にちゃんと説明して、わかってもらって一緒になろう。

……で♥ それからお揃いのウェディングドレスで式しよ♥ 今から楽しみだね♥」

主人公が笑いかけると、イヴがいよいよ涙ぐむ。

その姿を見て主人公は、今日、自分の事をたくさん話してよかったと思った。ちよつと情けなさすぎたり、気持ち悪すぎたりする場面もあったが……結果的にそれがイヴの喜びを引き出す要因になったのなら『まあ、よしとしよう』と思えたのだ。

●中央 至近距離

「涙ぐみながら。これまででも類を見ないほどに嬉しい」

うん。絶対叶える♥ 私も楽しみ。

その日まで、先生と一緒に頑張る♥

【同時に、ものすごくホツとする。

先ほどまでは、願ってもいい願いなのかかわからず、不安だったので」
へへ。先生も同じ風に思ってくれてて、嬉しい……!」

〈主人公〉

「同じに決まってるじゃん♥

そうだなあ……打ち明ける具体的な順番としては……まずは花音かなあ。

うちの学校の関係者じゃない共通の知り合いって言ったら、まずは花音だし。花音、イヴちゃんの事すごい好きみたいだから、ハードル低くていいと思うんだ」

● 中央 至近距離

「泣きそうなほど嬉しい。

自分が打ち明けた途端、主人公が具体的な提案をしてくれる事が嬉しい」
あ。そうだね。まずは花音さん……！

『ぜひともそれがいい』という感じで」

私もそれがいいと思う。

私と先生が仲良くなるきっかけくれた人でもあるし、私も、花音さんには早めに言いたい。

【少し間をあけてから。

実は、とっくに関係がバレているような気もするので】

でもあの人、もうとっくに知ってそうな気もしない……？」

それなんですよねえ。そう。それなんですよねえ。

主人公、イヴの指摘に、思わず深く、何度も頷く。

イヴと花音との出会いからはもう結構な時間が経ち、その間、何度か二人が出くわした事はあった。

すると、その場面には当然主人公もいる訳で……。

花音がこれに関して何か言ってくる事はなく、主人公たちは平和なおこもり密会愛を続けていく。

だが、聴く、するどい花音の事である。

主人公は、もうすべてがバレてしまっているような気がしてしまうのである。

〈主人公〉

「……わかる。あえて空気を読んで言わないでいてくれるだけで、すべてお見通しされてる感ある」

●中央 至近距離

「思わず笑ってしまう。主人公があまりにも真面目なトーンで言うので。」

またイヴから見ても、花音はそんな雰囲気があるので」

あはっ。先生もそう思う?」

〈主人公〉

「思う。何せ姉がこんな感じだからね。

そんな姉を持った花音は、姉の分まで諸々をフオローするべく、五感を研ぎ澄ませて生きてる女になったというか……」

だが、イヴには、主人公のそんな神妙な態度まで愉快に感じられるらしい。また、それだけ花音の人柄を信頼してくれているという事だろう。

……この感じなら、将来の義姉妹関係も安泰かもしれない。

えへ、そうだよ。わたしの可愛いイヴちゃんと花音だもんね。

きつとうまくいくよね。えへへへへ。

主人公、特に何かが変化したり、解決したりした訳ではないが、なんだかホツとした気持ちになる。

ちよつと楽観的過ぎるかもしれないが……少なくとも自分達には、こんな風にゆっくり話し合う時間があって、明るい信じられそうな未来がある。

そう思えたからだ。

「涙ぐみつつも、すっかり明るい声で。主人公と話しているうちにまた不安が消え、幸せで、将来が楽しみな気持ちになったので」

あはははは。そうなんだ♥

【少し間をあけてから】

少し真面目なトーンに戻って」

うん。そういう感じで少しずつ計画立てて、頑張って行きたいよね。

【少し間をあけてから】

改めて、真剣な想いを伝える」

ありがとう。大好きだよ、先生。

今は秘密でも、いつか絶対、お外を手繋いで歩けるようになろう」

そんな主人公に、今日何度目かわからないイヴの接近が訪れ、主人公はそっと目を閉じる。

それは夢見心地だが、その言葉に深く同意し、一緒にその未来を目指していくための、小さな誓いのキスだった。

●中央 至近距離

「少し間をあけてから」

※特に聞き手をドキツとさせるイメージでお願いします
大好きだよ……。

【少し間をあけてから、横向きに話しているのから、正面に戻っているイメージで】
※1回※ キスする。触れるだけだが、甘くて幸せなキス】
ちゅ♡「

ここでフェードアウトして終了。